トム・ギル
1999　「第一章　寄せ場の男たちー会社・結婚なしの生活者」西川裕子、荻野美穂編『男性論：共同研究』,17－43, 京都：人文書院。

社会の変化と偉人像
―林子平祭を中心として―

福井　侑子

1．はじめに

仙台市青葉区子平町にある龍雲院には、林子平が眠っている。林子平は江戸時代に生き、『海国兵談』『三国通覧図説』などを著して日本の国防に警鐘を鳴らしたが、江戸幕府に人心を惑わすとして処罰された人物である。だが処罰の直後林子平の警告が現実のものとなり、ロシア船などが通商を求めて現れ、それによって林子平の功績が讃えられるようになった。次第に太平洋戦争が激化すると、それに合わせて林子平の功績を顕彰する動きがより盛んになり、供養祭である林子平祭もはじまった。その祭りは形を変えながら現在も続いている。

本論文では林子平祭の歴史をたどり、その祭りにはどのような意味が与えられているのか、どのように変化しているのかを述べる。また、現在の林子平祭とその担い手について記述し、彼らの林子平祭や林子平に対しての気持ちを探る。それをもとに林子平祭にどのような意味が込められているのか、林子平の「偉人像」はどのようなものかを探る。

研究方法としては、龍雲院において林子平祭を運営する林子平先生祭典委員会の活動に参加してフィールドワークを行い、祭りが終わった後は、林子平先生祭典委員会のメンバーや龍雲院の住職、祭りの過去を知る人などに個人インタビューを行った。さらに河北新報、雑誌「仙台郷土研究」を中心に、過去の林子平祭に関する文献資料を調べた。なお、文献中の漢字の中で、旧字体で書かれているものは、新字体で表記した。

2．林子平と林子平祭

（1）林子平の生涯

林子平は1738（元文3）年6月21日、現在の東京に生まれた。姉・直が伊達家六代藩主宗村の側室となった縁で兄・嘉善が仙台藩士に取り立てられ、父や20歳になった子平も共に仙台に移り住ん

だ。子平は藩士にもならず生涯独身を通し、兄の家に世話になる「無禄厄介」という身分であった。

子平はそれを逆手にとって、学者をはじめ多くの人々と交流を持って見聞を広げ、蝦夷地や長崎など全国視察の旅をした。そうしているうちにロシアの勢力がシベリア地方に進出し、欧米諸国が植民地政策を行っているという情報を得、日本が幕藩体制をとっている状況では簡単に外国に侵略されてしまうことを悟った。そのことに警鐘を鳴らすため、日本の国防について論じた『海国兵談』『三国通覧図説』という兵法地理書を著した。

ところが江戸幕府は老中松平定信が「寛政異学の禁」を発しており、『海国兵談』はこの取り締まりにひっかかった。1791（寛政 3）年、林子平は「蟄居」を命じられ、その約 1 年後の 1793（寛政 5）年 6 月 21 日に亡くなった。

しかし、林子平が罰せられたわずか 4 ヶ月後の 1792（寛政 4）年、多くの外国船が渡来し開国と通商を求めるなど、林子平の警告は現実のものとなった。世間では林子平を評価する動きがおこり、死から 48 年後の 1841（天保 12）年、幕府から赦免された。その後おいの珍平が龍雲院に墓を建立した。明治時代に入ると子平への評価はさらに高まり、1882（明治 15）年に官位正五位が贈られ、1922（大正 11）年には正四位が追贈された。さらに 1942（昭和 17）年 7 月 21 日には、林子平の墓が国の史跡に指定された。

（2）林子平祭とは

林子平祭とは、林子平の菩提所である龍雲院で行われる林子平の供養祭である。併せて、海上戦死・病没・遭難者の供養、林子平先生祭典委員会の中で亡くなった人々である物故者も供養される。

林子平の命日は 6 月 21 日であるが、祭りは海の記念日である 7 月 20 日に行われている。それは、林子平が海防の重要性を訴えた人物であり「海の先覚者」と呼ぶにふさわしいこと、6 月 21 日は梅雨で雨が降りやすいこと[1]により、1942（昭和 17）年から海にちなんで 7 月 20 日に行われるようになった。1996（平成 8）年より、海の記念日は国民の祝日「海の日」になり、2003（平成 15）年、海の日は 7 月の第三月曜日となった。しかし林子平祭は昔から 7 月 20 日で慣れ親しまれているため、現在も 7 月 20 日に固定されている。

林子平祭は 7 月 19 日の逮夜法要から始まる。逮夜法要は命日の前日の法要のことで、午後 5 時から龍雲院の祭壇で読経と焼香が行われる。しかしこの日は一般の参拝客はない。7 月 20 日は、午後 2 時から祭壇で、林子平、海上戦死・病没・遭難者、林子平先生祭典委員物故者の供養のための読経・焼香をする。その後林子平の墓前で再び読経・焼香を行う。午後 5 時半から奉納演芸が営まれ、午後 8 時半に全ての日程が終了する。

林子平祭は、林子平先生祭典委員会という団体が中心となって営んでいる。それは町内会を母胎とした集団ではなく、龍雲院に所属している集団でもない。地域住民の有志で作り上げた個人的な団体

[1]海上で亡くなった人たちの霊の涙が、祭り当日に雨になって降っているという噂が祭典委員の人々の間であるほど、雨が降りやすい。

であると住職は話す。

祭りの費用は地域の寄付金によっており、それは祭典委員が個別に町内をまわって集める。毎年150万円ほど集まり、それを祭りのすべての経費にあてている。寄付をした人にはタオル、案内状、供物引換券が渡され、その券は当日に受付で供物の落雁と交換できる。

林子平先生祭典委員会には制服があり、明るい青のブレザーに白のシャツ、男性はえんじ色のネクタイ、女性はえんじ色のリボンである。そして左胸に「林子平先生祭典委員会」と書かれた白のワッペンが貼られている。この制服を19日の逮夜法要と20日に着用する。

林子平祭の当日は、境内の外に10店ほど屋台が並ぶ。これらは、祭典委員や龍雲院とは関係なく、宮城中央露店組合という組合の人々である。しかし「子平堂」という和菓子屋の露店は祭典委員の一人が経営している店であるため、特別に境内で店を開いている。

3．林子平祭の歴史的変遷

（1）命日に行われていたころ

林子平祭が始められたのは1929（昭和4）年である。祭りは六無会という会によって発起されたが、1939（昭和 14）年からは六無会と仙台先哲偉人顕彰会が共催で祭りを行いはじめた。仙台先哲偉人顕彰会の目的は「偉人傑士ノ功績ヲ顕彰シ其ノ徳ヲ仰ガシメ後進ヲシテ一層発奮興起」させるためであるという（仙台先哲偉人顕彰会編　1942：序）。

1929（昭和4）年から1941（昭和16）年まで、林子平祭は林子平の命日である6月21日を中心に2日間開催されており、余興に神楽や剣道の試合、琵琶の演奏等が行われ、法要は龍雲院の本寺[2]である輪王寺住職を中心に複数の僧侶で行われた。そして大学教授などが林子平祭を運営する会の幹事長など重役を担い、その人物の講演が行われていた。講演は例えば1932（昭和7）年の中村徳重郎[3]による「林子平先生と工藤球郷の意見の相違点について」（河北新報：1932）、1941（昭和16）年の阿刀田令造[4]による「林子平の人物と国防論」（河北新報：1941）などである。1934（昭和9）年の仙台市五ッ橋高等小学校の教員である小松郁雄による、新聞に掲載された読み物「子供の時間　お話　林子平先生」では、「先生の大理想は着々として日本海々戦に大勝利を博して以来、海国日本の誉は世界に輝き太平洋平和の守としての責任ます々重大なる時にあたり、海の国の先覚者林子平先生をしのぶことは誠に意味深いものであると思ひます。」（河北新報：1934）とある。このころの林子平祭は、地域の小さな祭りにとどまらず、政治家や学者も関わる大きな祭りであったことが伺える。そして、1934（昭和 9）年の小松郁雄の掲載記事や仙台先哲偉人顕彰会の目的からは、林子平祭と戦争との関連が

[2]龍雲院は輪王寺の「末寺」であり、逆に輪王寺は龍雲院の「本寺」である。「本寺」と「末寺」の関係は、「本家」と「分家」の関係のようなものである。
[3]宮城県出身で当時東京に住み、弁護士として働きながら林子平の研究を行い、遺品を多く集めていた。
[4]当時第二高等学校校長。六無会幹事長、後に仙台先哲偉人顕彰会副委員長にもなった。

伺える。

（2）海の記念日制定から終戦まで

太平洋戦争が始まって2年目である1942（昭和17）年は林子平没後150年にあたる。仙台先哲偉人顕彰会では1941（昭和16）年に海の記念日が制定されたことから、1942（昭和17）年より林子平祭を7月20日に行うことに変更した。

林子平150年祭は、7月15日から22日まで仙台市を中心に子平先生百五十年祭式、奉納市民演芸大会、海軍軍楽隊演奏、海洋少年団の交流、記念遺物展覧会などの記念行事を九つ行い、盛大に行われた。主催は行事によって異なり、河北新報社や仙台先哲偉人顕彰会、仙台地方海軍人事部、斉藤報恩会など、後援は海務院、海務院塩竈支局、仙台市、仙台市商工会議所、仙台市各国民学校などである。林子平 150 年祭が行われる理由は、「海防の先覚、林子平友直逝いてここに百五十年、いま七つの海に砲火を交へて大東亜戦争を戦ふ銃後国民に日本の意気を鼓吹すると共に郷土の先蹤林子平の霊を祀って憂国烈々の業績を顕揚、故人を偲んで海への心構へを高揚するため」（河北新報：1942a）とされている。催し物の結果は「海を征する人智の数々に驚異の目を瞠って今更の如の認識を深めた」（河北新報社：1942b）という評価であった。

150年祭の後、河北新報に林子平祭に関する記事は掲載されなかった。しかし伊東信雄の林子平先生151年祭による講演「帝国海防の発達と林子平先生」では、「爾来五十年間における連年の建艦と、猛烈なる訓練によつて帝国の海の護りは今や完璧である。帝国が世界の二大海軍国である英米を相手に戦ひつゝある時、国民が海の護りに対しては些かの不安をも抱かずに居られるのは帝国の海防が厳然として備つてゐるからである。」（伊東　1943：3 - 8）と述べられている。さらに龍雲院の住職や当時の林子平祭の様子を知る人のお話によると、1943（昭和 18）年は海軍大将が龍雲院を訪れ、軍艦マーチが演奏されたという。しかし1944（昭和19）年、1945（昭和20）年には戦況が厳しくなり、灯火管制がしかれて大々的な祭りはできず、終戦までは供養だけが行われたという。

以上のように、林子平の供養以外に行われる行事を見ると、林子平祭は軍国主義の普及に用いられていたのである。

（3）終戦による祭りの衰退と復興

終戦後も、河北新報にはしばらく林子平祭の記事が掲載されていない。しかし、亡くなった父親がかつて林子平先生祭典委員会のメンバーだったある人物のお話によると、1945（昭和20）年7月10日の仙台空襲の2日後、「陸軍憲兵隊」と「護仙部隊」が龍雲院に8月17日まで駐屯し、1945（昭和20）年は供養だけを行ったという。終戦直後、仙台空襲で焼け出された市民が龍雲院に間借をしており、1948（昭和23）年まではお祭りらしいことはされなかった。しかし1950（昭和25）年、1951（昭和26）年は友達を連れて、1952（昭和27）年は現在の奥さんを連れて祭りを訪れたという。このことから、祭りが終戦から数年後には復活し、屋台が立ち並んで演芸も行われたことがわかる。

河北新報の新聞記事は、1952（昭和 27）年から再び掲載されるようになった。参列者は少なく子供達も林子平の業績を知らず、林子平祭が年中行事から地元のレクリエーションになってしまったことが嘆かれている。だが、重要文化財に指定する運動を始めるなどしているうちに祭りは活気を取り戻し、1954（昭和 29）年、小松前東二番丁小学校校長による「六無斎子平先生の話」という講演が戦後初めて行われ（河北新報：1954）、1955（昭和 30）年は、県警察ブラスバンドが軍艦マーチを演奏した。

この時代、日本は GHQ 占領下に入り、三権分立制の民主主義国家になるため法律や政治機関を整え、1951（昭和 26）年サンフランシスコ講和条約により主権を回復した。

終戦後すぐのころに新聞に林子平祭の記事が掲載されていないことは、戦時中に林子平祭が軍国主義を普及するという性格が強かったため、GHQ 占領下でタブーとされたからではないかと考えられる。その証拠に戦後再び新聞記事が載せられるようになった 1952（昭和 27）年、また祭りが活気を取り戻した 1954（昭和 29）年ころは、日本が主権を回復した時期と重なる。

（4）パレードの開始

1956（昭和 31）年から、林子平祭は新たに盛り上がりを見せる。この年、仙台海の記念日実行委員会が林子平祭を主催した。子供達が中心となって「海の記念日」と書かれたプラカードを持ち、御輿をかついで町内を練り歩いた。そしてこの年初めて、海上戦没者・殉職者・遭難者の供養が林子平の供養と合わせて行われた。さらに、東北大学伊東信夫教授による「林子平の海事に関する事蹟について」という講演が行われた（河北新報：1956）。

1957（昭和 32）年からはパレードが始まった。パレードは繁華街を行進し、八幡小学校、仙台一中、塩竈一中、塩竈三中、尚絅女学院などのバトンガールやブラスバンド、自衛隊や県警、塩竈海洋少年団、仙台海洋少年団などが主に参加し、海の日にちなんで林子平の功績をたたえるとともに、1957（昭和 32）年のように「海洋に眠る霊を慰めよう」などと書かれたプラカードを持ち、「海洋思想の普及」を図るようになった。

この「海洋思想」が、年を経るごとに変化している。昭和 40 年代半ばまでは、日本は海に囲まれておりその海は世界に通じるものであるから、日本人として海の存在を忘れてはいけない、といったものであるのに対し、その後は次第に、日本は海に囲まれており私たちの生活と海は密接に関わるものであるから、極力事故を起こさないように、また環境を破壊しないようにといったことに変化している。

そして、始まった当初河北新報にはパレードの記事よりも林子平の遺徳顕彰祭、海上戦没・殉職・遭難者の慰霊祭が中心に書かれていたが、次第にパレードが中心的に書かれるようになり、記事も小さくなり、近年は掲載されなくなっていった。

以上のように、終戦から多くの年月がたち軍国主義から民主主義に変わっていくとともに、海の記念日で主張する「海洋思想」が国家的な範囲のものから個人的な範囲のものへと変化していき、林子

平祭の取り上げられ方も小さくなり、林子平祭自体も「国の祭り」「仙台市の祭り」から、子平町の「地元の祭り」へ変化しているのである。

（5）200 年祭から現在まで

林子平没後 200 年にあたる 1992（平成 4）年は、例年より盛大に催された。この年は仙台市博物館において 6 月 13 日から 7 月 26 日まで、企画展「林子平ーその生涯と思想」が催された。この展覧会には、林子平の遺物や、『海国兵談』の林子平直筆の原稿などが展示された。さらに、7 月 4 日、仙台市博物館において、守屋嘉美による「仙台藩・開明思想の人々ー林子平と工藤平助」という講演会が開かれ（林　1994　44-49）、7 月 20 日にはパレードも行われた。また、『波濤（林子平先生の詩）』という林子平先生 200 年祭顕彰記念歌が作られた。これは、作詞なか光男、作曲長浜勇二によって作られた。（中居　1992：80 - 81）。なか光男は、龍雲院の護寺会[5]に参加している「中居堂」という仏壇・仏具店の主人である。

この年の林子平祭の運営は、中居が龍雲院の責任総代となり、祭りの企画と運営のすべての責任を負って実施した。寺院の役員や祭典委員のさまざまな事業計画を実行するにあたっては、それを検討し、周囲の賛同を得て準備を進めたという。

ところで、この年はパレードが行われた最後の年になった。祭典委員のお話によると、パレードの開催には林子平先生祭典委員会が携わっており、寄付金で成り立っていた。それに加えて東北海事広報協会が後援し、経費が出されていた。1992（平成 4）年、林子平先生祭典委員会は、例年よりも多く寄付を出してもらった。そのため 1993（平成 5）年には、また寄付を出してもらうのを申し訳なく思い、1 年だけパレードを休むことにした。しかしその翌年の 1994（平成 6）年、東北海事広報協会が林子平祭に関係する予算を縮小したため経済的に困難になった。それに加えて祭典委員のメンバーが高齢化しつつあり、人数も減って人手不足となっていた。そのため祭りの当日に境内の飾りつけなどで精一杯となり、街頭パレードまで手が回らなくなってきた。そこで 1994（平成 6）年からはパレードは行わず、祭りの規模を縮小して「地元の祭り」として継続させていくことに決めたという。

（6）終わりに

以上述べてきたように、林子平祭の変化には社会の変化が関連している。戦前は軍国主義の普及という意味が祭りに与えられた。終戦にともない祭りは一時途切れるが、祭りが活気を取り戻したのは、日本が主権を取り戻したときと一致する。そしてこのころから、海にまつわる死者の供養や、「海洋思想」の普及という意味が祭りに与えられた。そして不景気になると同時に、祭りを盛大に行うことが困難になり、祭りは縮小され地域の祭りとして続いていくことになった。

このように林子平祭は、社会の変化とともに与えられる意味が変化し、それが祭りの内容に反映し

[5] 寺院施設の整備をしたり、寺院で行われる行事を企画・実施したりする、檀家による組織のこと。

ているのである。

４．現在の林子平祭

（1）林子平祭の準備から終了まで

毎年５月の末から６月になると、林子平先生祭典委員会の活動の中心的存在であるＧさんが、祭りを開催するかどうか龍雲院の住職に電話で確認をとる。その確認が取れた後、呼びかけを祭典委員の人々に電話で個別に行う。その数日後には、龍雲院において祭典委員会の話し合いが持たれる。

2004（平成16）年は、6月9日、6月28日、7月13日、7月16日の４回委員会が行われた。委員会では前年の祭りを参考にしながら予算やプログラムを組んだり、仕事の役割分担を決めたり、カラオケ大会の応募を募ったり、寄付を集めたり、ポスターを貼ったりした。他に祭典委員のうち2〜3人が龍雲院近くに旗を立てたり、会計係が謝礼金や諸費用の支払いのため寄付金を新札に替えたりした。

毎年7月19日は、林子平の逮夜法要が営まれる。2004（平成16）年は午後4時から、門前に旗を2本立てる簡単な準備をした。その後、午後5時から龍雲院の本堂において法要を行った。法要のとき祭典委員は制服を着用する。

7月20日の林子平祭当日は、朝8時半から境内において、祭典委員のメンバーと手伝いの人々、当日アルバイト3人が中心となって紅白幕、ばれん[6]などの境内の飾り付けを行う。境内の外の道路では、屋台の準備が行われる。2004（平成16）年は9店が出店した。

祭りは正午を過ぎると次第に客が集まり始める。それに合わせて、祭典委員のメンバー数人とアルバイト3人が、供物と引換券を交換するための受付を始める。受付では、寄付のお礼に渡された供物券と紅白の落雁とを交換できる。そして当日も寄付金を受け付けている。

午後2時からは林子平の供養と海上戦死・病没・遭難者、林子平先生祭典委員物故者の供養を行う。龍雲院婦人会の御詠歌の後、林子平の法要が輪王寺の住職を中心に行われる。その後、海上戦死・病没・遭難者と、林子平先生祭典委員の物故者の供養が龍雲院の住職を中心に行われる。それぞれ読経の後には、参列者が焼香する。祭壇での法要が終わると外に出て、林子平の墓前で読経と焼香が行われる。

その後、午後5時半から奉納演芸大会が行われる。2004（平成16）年の演芸大会は、迫太鼓、子供カラオケ大会、すずめ踊り、ハワイアンダンス、プロ歌手の歌、すずめ踊り、大人カラオケ大会、日本舞踊、の順で行われた。その後、カラオケ大会の審査をして表彰し、8時半に演芸大会が幕を閉じる。

この日の全ての日程が終わると、祭典委員のメンバーとアルバイトで境内の飾り付けをすべて片づ

---

6 ピンクの紙の造花が竹の棒に複数つき、先に黄色の色紙がつるされた飾りのこと。

け、龍雲院内で夕食を食べお酒を飲み、10 時頃に解散する。

祭りの後の数日間はメンバーそれぞれが個人的に祭りの後始末をする。その後に祭りでかかった費用の支払いがあるが、2004（平成 16）年は 7 月 24 日にまとめて行われた。その後 8 月から 9 月にかけて、会計係の人が集まって決算を出し、反省会の準備をする。反省会は 2004（平成 16）年は 9 月 25 日に行われ、龍雲院に集まって決算を確認し、来年の祭りの手配で必要だと思ったことなどを話し合い、飲み屋に移動し打ち上げをした。

このようにして、一年の祭りの日程は終わる。

（2）林子平祭に携わる人々

林子平祭を運営している集団は、先にも述べているように林子平先生祭典委員会である。林子平先生祭典委員会に現在参加している人は、龍雲院の住職 2 名を含め 19 名である。メンバーは龍雲院周辺や土橋通を中心に、個人商店を営む人、国会議員・県議会議員・市議会議員など政治に携わっている人、町内会の役員をしている人、龍雲院の檀家の人が中心である。祭りの準備段階で寄付金を集めるときに近所の人に顔を覚えてもらっていたほうが、気持ちよく寄付金を集められるという。

また、祭典委員会の人々は、親や祖父母の代からやっていた人、亡くなった夫がやっていた人、過去に祭典委員だった議員の事務所に勤めている人が、遺志を受け継いで祭典委員のメンバーになったという場合も多い。祭典委員物故者の顔ぶれを見ると、数代前が龍雲院近くの地主で地域に顔が広かった人が多いという。ところが祭典委員で亡くなった人のなかには遺族が遠くに引っ越して現在は祭典委員の跡を継いでいない人、祭典委員に参加できる跡継ぎがいない人などもいる。

その一方で、そのようなつながりが一切ない人もいる。現在の祭典委員メンバーは高齢の方が多く、人数も少なくなっている。そのため祭典委員会では毎年、新しい祭典委員メンバーを増やすことが課題となっている。会社勤めの人は忙しく時間の自由が利かないのに対して、個人商店を営んでいる人は、年に一度くらいは祭りのために時間が工面できるだろうということから、龍雲院の近くの個人商店を営んでいる人、町内会の役員をしている人を中心に声をかけている。そのような人の中には祭典委員の誰かと知り合いで、その人の頼みなら断れないということで承諾した場合が多い。またこのような人の中にも、祖父が祭典委員をしており、一度は途絶えたもののまた声がかかった、祭典委員のメンバーの一人のいとこで、町内会の役員をしており、声がかかったという場合も見られる。

しかし、このような努力にもかかわらず、新しいメンバーがうまく集まっていないのが現状である。実際に 2004（平成 16）年に行われた林子平祭の準備の時期に、土橋通りに面する個人商店に声をかけていたが、断られてしまった。

（3）祭典委員の林子平祭への気持ち

林子平祭は形を変えながらも長く続いている。その理由を探るため、林子平祭に関わっている人々に、林子平祭を続けていこうという気持ちはどこからくるのか質問した。

その中で最も多く見られた意見は、「活気を出すため」というものだった。それらはお寺や地域の活気を出すため、自分が育った地域に恩返しするため、地元として絶やすべきではないため、などといった気持ちをもとにした意見だった。

また「若い人に戦争の悲惨さを伝えたい」という意見もあった。林子平祭では、海上戦死・病没・遭難者の供養も行う。だがその供養や戦争に対する思いを祭りを続けていく理由として挙げた人は、あまりいなかった。

また、「子供」との関わりを答えた人もいる。それは子供時代に慣れ親しんだ思い出が残っており、それと同じように現代の子供達に思い出として残して欲しいため、そして今の子供達が大人になったときに思い出し、代々林子平祭を継承してきた人々の意思を受け継ぎ、林子平先生の功績を顕彰して長く続けていって欲しいと思う、ということであった。

さらに、祭りの運営を、自分自身の楽しみとしているという意見も出た。役割を持って祭典委員のメンバーで協力しながら、いろいろとやっていく作業が楽しくやりがいがある、また一年に一度、祭りを通して顔をあわせられることが嬉しいという気持ちだった。

祭りを毎年努力して運営している人を信頼し、祭典委員に入って欲しいという頼みを断れない、お手伝いをやめるにはしのびない、できる人がやらなければいけないという意見も見られた。ある人は、そういった気持ちを「義理と人情」という言葉で表現していた。やらなきゃいけないという気持ちではなく自然とやるのが普通だと思っている、と付け足す人もいた。

「林子平の功績を顕彰する」という意見については多くの人が、それがあるのは言うまでもない、それが第一の目的ではある、といったように、それぞれの気持ちのもとになっているということだった。ただ一番にその意見を出す人はいなかった。私が聞かなければ意見が出ない人もいた。

以上のような意見の一方で、多くの人が「地域に子供が少なくなった」「娯楽が多様になったため祭りに客が来なくなった」「子供も大人も冷めている」ということを感じていた。そして今の時代は祭りの開催に地域の発展を求めるのは難しいのではないかという意見も見られた。現代は核家族化が進み、仕事も会社勤めが多く、近所の付き合いが希薄な時代になっているためか、子供の祭りへの参加を渋る親が増えているという。

それに加えて、「地域に寄付を求めることも次第に困難になっている」、という意見も複数聞かれた。その理由としては、地域の人々に信仰心がなくなってきたから、近所づきあいが希薄になり地域のイベントがはやらなくなったから、という意見が見られた。寄付集めが終わると後は毎年決まったことをやるだけだから、祭りの準備で一番大変なことは寄付集めだ、現在の形の祭りを維持していくことで精一杯だという意見も見られた。

以上のような考えを持った人のなかには、林子平祭で林子平を顕彰するといっても、「現在の寄付金の範囲では龍雲院で顕彰を大々的にやることは難しい」という意見もあった。

（4）祭典委員の林子平に対するイメージ

現在の人々は、林子平をどのような人物と見ているのか。林子平祭に携わる人々に、林子平が偉人と称される理由を尋ねた。

最も多かった意見は、日本は鎖国していては危ないため国防をきちんとやらないといけないことを訴えた、などの「社会に警鐘を鳴らしたこと」であった。

また、あの時代にあそこまで資料を集めたという情報収集力がすごいといったように「行動力」を評価する意見も多く見られた。そして、広い視野で日本を見つめ、このままでは日本はどうなるかといった「先見性」がかなりあったことを評価する意見も出た。

不遇のなかで亡くなったことを惜しむ意見もあり、閉鎖的な社会に敢えて世間に発表した「勇気」もすごいという意見も多くあった。そして、後世の人々にいつまでも感慨を持たせる不思議な影響力を持ち続けたこともすごい、という「カリスマ性」についての意見もあった。

だがなかには、林子平の功績は祭りとは関係ない、と林子平祭が遺徳をしのぶといった目的から外れていることが感じられる意見も見られた。また、あまり詳しく調べていないからわからない、文献を見てみないと詳しく分からない、といった答えも数人あった。

以上のことから、現在の林子平の偉人像は、かつてのように政治的思惑とは完全に切り離されていることが分かる。そして現在の林子平祭は、林子平の功績を讃えるためというより、地域に活気をあたえるためという気持ちのほうが優先しているように思われる。

5．おわりに

江戸時代に生きた不遇の偉人・林子平は、1929（昭和 4）年から現在までの 76 年もの間、社会が変化するにともなって内容や与えられた意味も変化しながらも、林子平祭としてその功績を讃えられ供養されてきた。そしてそのような歴史を持つ林子平祭は、現在はどのようなものになっているのか、どのような人々が携わり、その人々は林子平祭と林子平に対してどのような考えを持っているかを述べた。

林子平は江戸時代、自分の体で情報を集め、それを元に分析をし、日本の国防に警鐘を鳴らした。だが江戸幕府はそれを受け入れず、人心を惑わすとして処罰した。林子平は無念のうちに亡くなったが、林子平の警告は現実化した。

明治から昭和初期にかけて、日本は日清・日露戦争、第一次世界大戦などを経験し、世界恐慌も起こって国際情勢が緊迫した。1941（昭和 16）年に太平洋戦争に突入すると、国家総動員で戦争を勝ち抜こうという政府の思惑が強くなり、戦況が不利になってもそれを国民に知らせず、国民に苦しい生活を強いた。政府は国民に対して、戦争への士気を上げるために、「偉人」を尊敬してそれに続こう、偉人のようにお国のために尽くそうと訴えかける動きを盛んに行った。林子平はその「偉人」として讃えられ、林子平祭が例祭として始められ、150 年祭は特に盛大に行われて、祭りを通して軍国主義

が普及された。

戦後、林子平祭は一時衰退するが、日本の主権回復とともに再び盛り上がり、時代によって変化する「海洋思想の普及」のためのパレードが、また海上戦没者などのための供養が、林子平祭と合わせて行われるようになり、林子平祭は新たな意味を与えられた。

そして現在、林子平祭はかつてのような政治的思惑とは離れて「地域の祭り」となった。祭りは林子平先生祭典委員会によって運営され、7月19日の逮夜法要、7月20日の林子平、海上戦死・病没・遭難者、林子平先生祭典委員会物故者の法要、林子平墓前法要のあと、奉納演芸が行われるという形になった。しかし、はやる祭りが変化してきたことによって、林子平祭に活気がなくなっていることが課題となっている。現代の林子平祭も、社会の変化とともに衰退を余儀なくされているのである。

このように林子平祭は、社会の変化とともに与えられる意味が変化し、それが祭りの内容に反映しているのである。だが、現在の林子平の「偉人像」は、国家の思惑とは完全に切り離され、客観的に功績を捉える態度となって林子平祭の担い手たちに認識されているのである。

引用文献

林三喜子

1994　『続　蝋梅日誌』東京：林三喜子。

伊東信夫

1943　「帝国海防の発達と林子平先生」『仙台郷土研究』第13巻第8号：3 - 8。

河北新報

1932　「先覚林子平百四十年祭　余興もあり頗る賑ふ」『河北新報』1932年6月22日。

1934　「子供の時間　お話　林子平先生　仙台　小松郁雄」『河北新報』1934年6月21日。

1941　「先哲をしのぶ　きのふ林子平追悼法要」『河北新報』1941年6月22日。

1942a「絢爛海国絵巻　本社主催　林子平百五十年祭」『河北新報』1942年7月5日。

1942b「“海国まつり”絢爛の幕開く『海へ』沸たつ全市　遠来の豆水兵さんと交流」『河北新報』1942年7月19日。

1954　「きょう子平祭」『河北新報』1954年7月20日。

1956　「海の先覚者偲んで　仙台市龍雲院　林子平顕彰祭を挙行」『河北新報』1956年7月21日。

中居光男

1992　『林子平先生の生涯』仙台：龍雲院。

仙台先哲偉人顕彰会編

1942　『海の先覚者林子平先生』仙台：仙台先哲偉人顕彰会。

松川だるまの民族誌

藤　智仁

1．はじめに

「松川だるま」とは、和紙を型抜きして絵を描いた張子玩具の一種で、江戸時代末期から仙台で作られ続けてきただるまである。天保年間（1830~1844）に伊達藩の藩士・松川豊之進が創始し、それ以来下級武士の収入を補うための内職として作られてきたという。最多時には 10 軒以上を数えた業者であるが、現在では松川だるまを製作しているのは、仙台市内に 3 軒のみとなっている。その中でも同市柏木にある「本郷だるま屋」が松川だるまを継承している。

そもそも松川だるまは毎年の縁起物であり、人々は正月が来るたびに松川だるまを買い求め、前年のだるまを各地のどんと祭で燃すのが通例であった。新しいだるまは神棚に祀られ、1 年間の無病息災や五穀豊穣が祈願される。しかし、そのようにして信仰とともにあったはずの松川だるまもある時から観賞用の郷土玩具として、言いかえると伝統的工芸品として人々に捉えられるようになった。物の持つ意味が時代とともに変化したのである。

本論文では、まず松川だるまの歴史やその作り方を記述する。また本郷だるま屋について、その職人たちや 1 年間のスケジュール、さらには顧客などについて言及し、本郷だるま屋のモノグラフを作ることを目的とする。そして松川だるまが昔と現在で人々にどのように認識されているかを明らかにする。

2．松川だるまの歴史

私がフィールドワークを行った本郷家によると、松川だるまを創始したのは仙台藩士松川豊之進であると伝えられている。だるまに冠されている松川という名もその創始者に由来する。天保年間（1830～1844）に始まっただるま作りは、その後下級武士の収入を補うための内職として作られてきたという。松川だるまは正月の縁起物として仙台庶民の信仰を集め、神棚に祀られてきた。

縁起だるまの風習がいつ仙台に伝わり、松川豊之進がどのように松川だるま作りを始めたのか、その辺りの事実は残念ながら文書に残されておらず、ただ本郷家に伝わる伝承から推測する他ない。ただし、松川豊之進という人物の存在は分かっている。鈴木（1972:182-183）によると、豊之進は仙台藩の参政書記だった。明治維新によって新政府から世良修蔵参謀という人物が仙台藩に送られてきたのだが、豊之進は旧幕府派の藩士たちとともに世良参謀を暗殺したのだ。1868 年のことである。その